『切なさ (01/05)』

子供は 切なさを
身につけて大人になっていく
人を愛することも
自分の性格も
せつなさを身につけて
大人になっていく

せつなさ が消えたとき
人は鬼になる
生命の炎が火炎地獄になる
せつなさ が芽生えたとき
一条の光が射し込むように
火炎地獄が生命の炎となる

幼児は せつなさを
知ることによって大人になる
人を慈しみ
自分を慈しみ
切なさ を知ることによって
子供は大人になっていく

『悲しみ (01/05)』

悲しみは 胸を締め付けます
心が 痛いほど辛くします

悲しみを知ることによって
他人の痛みを知るようになるのですね
悲しみを心に宿すことによって
人は人生の豊かさに導かれるのですね

生きる 様々な人々の音色の響きが
心に 痛いほど通じてくるのですね

『説く事 (01/05)』

人は平等だという
人は自由だという
人は誰もが
その権利を持っていると説く

人が平等である社会を
人が自由である社会を
人は誰もが
その社会を持っていないじゃないか

『祭り日 (01/05)』

孤独な男は
祭りの日々が怖いのです
天涯孤独のみで
愛を捨ててしまった
人生を語る供もいなく
供に食事をする人もいない
いつも一人だから
孤独な男は
祭りの日々が怖いのです

『投票権 (01/11)』

人は誰もが投票券を持っている
明治以後の多くの人がね
それこそ 社会システムと戦って
得たものなんですがね

多くの人がそのために
命を落としたり
理不尽な圧力で一生を終えました
日本に民衆参加の政治を夢見て

『若者へ (01/11)』

文明の光を民衆に
文化の恩恵を一部の人々ではく
万民の上に投射するように
明治大正昭和の政治と戦って

平成になって
水のように投票権は
有るものだと
風のようにすべてが
運ばれてくるものだと
若者は投票にも行かず
携帯電話で自分が
社会の一員であることを
若者は確認する

空気が永劫普遍に存在するものか
水が大海原が永劫であるかどうか
風がなぜ大気の流れとなっているか
人が何故，より強いものの下で
奴隷としての生活をしないのか
能力ある者も劣る者も
富める者も貧しき者も
人は等しく同列であることを
標榜とした社会構築を
いま，若者から崩れ去ろうとしている
投票権も 時の権力によって
消えていきますよきっとね

『鏡の像 (01/11)』

日本の醜い現実が
若者たちによって築かれようとしている
悪を悪として処理できない社会を見て
若者は立ち上がるとせず
醜い社会に同化して事なかれ主義で
人生を標榜していこうとしている

End all 2001/01

『ホーイー ホーイー (02/01)』

悲しい声で ホーイー ホーイー
涙の音色で ホーイー ホーイー
夕暮れ町の 黄昏に
鎮守の森で 響く音は
何が淋しくて鳴くのやら
ホーイー ホーイー ホーイー

夜明けの町に響わたる
ホーイー ホーイー ホーイー
霞の鎮守の森からね
涙か露に濡れたのか
ホーイー ホーイー ホーイー
朝日を呼んでる音色かな

ホーイー ホーイー ホーイー
人の世苦しさあるけれど
たった一つの幸せを
恋し祈った願掛けの
希望の光を呼んでいる
ホーイー ホーイー ホーイー

『雪 (02/07)』

雪の降る日は
難儀です
文化も文明も

南の国には
雪が無いという

北の国には
寒さが有るんです
雪を降らせる

『暗幕の舞台 (02/12)』

村の100人が集まった
暗幕の中で
道化師は語り始めた
Breathe in deeply
And breathe out slowly
道化師も100人も
タンバリンの音が震え
100人は道化師になり

道化師の心は
100人の心になって
響き戻っていった
100人が100人の心を
共有し 供に悲しみ
供に 喜びも共感し
道化師の語りは
Breathe in deeply
And breathe out slowly.

『Wher……? (02/13)』

ここは どこ……?
私の 目指す
その場所ではない

ここは どこ……?
愛する人も いなければ
愛される事も ない

ここは どこ……?
寂しさが 漂い

悲しみが 蔓延している

ここは どこ……?
いつになったら
私は 辿り着くのだろう

私の笑いは 何処に行ったの
うつろな 日々の中で
見失って 消えてしまった

私の 愛は何処に消えたの
人々の 冷たい視線の中で
恐れおののき 消えてしまった

寂しさの 海の中で
人々は 語りを無くし
愛する事も 無くし

悲しみの 海原の中で
人々は 明日への希望も

描く気力をも失い

ここは どこ……?
ここは どこ……?
ここは どこ……?

『**春**(02/24)』

春の海は真珠のように
キラ キラ と輝いていますか
病棟から見える 瀬戸の海原は
春を呼んでいますか

海原は 人生の涙も
悲しみも 透明にしてくれるますね
黄金色に染まった海面
月夜を映している海原
荒れ狂う海の怒り

海原は天井の星々と同じですね
人の優しさを 人の小ささを
温かく抱擁してくれる

尽きせぬ苦しみを聞いてくれる

End all 2001/02

『桜 (03/28)』

さくら さくら
一斤染 の花びらは
夜のライトに浮かび魅せ
風の流れに 揺れうごく
人の流れに 旅路の思い
一斤染の 花びらは
人の流れの 旅路の里か
さくら さくら
旅路の 花よ

さくら さくら
石竹色の 花びらは
古樹の 証しの花びらか
風になびいて 揺れうごく
人の旅路の 思いでか
石竹色の 花びらは
人の門出の 思いでか
さくら さくら
旅路の 花よ

さくら さくら
桜の 花よ 花びらよ

人の思いで 集め咲き
風の流れに 舞い散るは
旅路の涙を 拭き取るように
桜の 花よ 花びらよ
心の涙を 優しく包み
さくら さくら
旅路の 花よ

End all 2001/03

『**春**(04/06)』

一人ぼっちにも春は来る
泣きたい心にも春は来る

ほかほかと 暖かい陽射しが
人生まで明るくしてくれる
ほかほかと 明るい陽射しが
心にゆとりを作ってくれる

一人ぼっちにだって春は来る
凍てつく心にだって春は来る

柔らかく優しい陽射しが
明るい希望を灯してくれる
ほかほかと暖かい陽射しが
生きる勇気を燃やしてくれる

『**桜**(04/08)』

満開に咲いた花びらは
一風ごとに ひら ひら ひら と
飛んでいく いくつもいくつもの
花びらが 風に飛んでいく

風に舞う 花びらのカーテン
ひら ひら ひら と
ながされ ゆられながら
大地へと 落下していく

花びらの 絨毯小道を
人は歩いていく
人々は歩いていく
家族連れも友達同士も恋人二人も

『**花嫁姿**(04/11)』

樹々の間から
木漏れ陽が揺らぎ
緋もうせんの上に
花嫁姿を
お母さんは 夢見ています
緋もうせんの上の
あなたの 花嫁姿が
木漏れ陽の揺れ射すなかで
どんなに美しいかを
きっと お母さんは知っている
お父さんが涙を流すことも
お母さんは知っているのです
いつかきっと来る日を
お母さんはとうに見ているのです
緋もうせんの上で
両手をついているあなたの花嫁姿を
春の木漏れ日の眩い中で
お母さんは見ているのですよ

樹々の間から
木漏れ陽が揺らぎ
緋もうせんの上で
あなたの花嫁姿が
眩い美しさを見ているのです

『**夢**(04/11)』

ひらひら 舞い落ち夢
一片一片 風に舞いながら

ひらひらと 夢が風に揺れ
大地へとまた落ちていく
人々の想いの夢が
人々の心の思いが
ひらひらと 風に揺れ
ひらひらと 風に流れ
一片一片 大地へと着地する
一片一片 風に舞いながら
ひらひら 風に舞い落ちる

人は誰もが 持っている

季節は めくりめくり
ふたたび その日が訪れる
誰にも 公平に
己の その日が
必ず 確実な 足取りて
その日が やって来る

きっと 知らないのかも

ラッタッタ ラッタッタ
でもね 神様に祈るんですよ
人にはどうにもならない力を
神様は 持っているから
行ける者も 残るものも
みな 一様に幸である事をね

『誕生日 (04/13)』

季節はめくりめくり
ふたたび その日が来る
過ぎ去った時間も
未来の時間にも
季節がめくりめくり
その日はやって来る

人は 誰も持っている
その日を その日を
家族がいても
多くの人がいても
己の その日を

『ラッタッタ (04/22)』

ラッタッタ ラッタッタ
神様って 純粋な心だけなのかな
人は だって
純粋な心ばかりではないから
いろんな心が混ざっているから
人は神様より複雑なんだ

ラッタッタ ラッタッタ
昨日 生まれた子もいれば
今日 みまかった人もいる
神様は死なないから
人の心など 悲しみなどはね

『鈴 (04/26)』

世の中に鈴が無かったら
きっと 音楽も無かったろう
鈴の音色に 人は古代から
耳を傾け 心を傾け
希望と勇気を持って来た

昔からも 今からも 未来へも
鈴の音色が 響いている
一本道のように
鳴り響き渡っている
貴方の心にも 生命の雫にも

世の中に鈴が無かったら
人はこの様ではなかったろう
人を愛し人をいくしみ
生命の心を昔に
今に未来へもてなかったろう

生命は何故に生まれる
生命は何故に死んでいく
死ぬ事をわかりながら
生命は何故に誕生する
未来で待っているのは
死と生きの忘却なのに

End all 2001/04

『生命 (04/29)』

人は何故に生まれる
人は何故に死んでいく
死ぬ事をわかりながら
何故に生命は生まれる
新しく生まれそして
生命は死んでいく

己しかわかることが
出来ない生きの思いも
等しく忘却の彼方に消える
なのに生命は何故生きる
生きの喜びも辛さも
生きの悲しみも切なさも
生きの苦しさも悩みも
死に消え忘却の彼方

『野道 (09/02)』

月に照された野道へ
道化師が現われて
たった一人歩いている
深閑の野道を
戯けながら未来へと
旅人は独り歩いている
星々の煌きを仰ぎ
星々の響きに耳を傾けて

淋しさを舞って
悲しみを舞って

月の明かりに
戯けの舞は照されて
深夜の闇を背景に
道化師は未来へと
夢を追い続けて舞っている
月夜の野道を
煌めいている星を観客に
旅人は舞戯け
明日へと歩いている

『杜中 (09/02)』

杜中の庭が
小雨の闇に
ひっそりと
照らされている
根もとの芝に
凡てが染み込まされ
静かに佇ずんでいる

まるで哀しみを
諦めたように

まるで涙を
諦めたように

濃く湿った杜中の枝は
闇に己の濡れを隠し
照らされた灯の中で
大気の滋養を吸っている

まるで人と生れなかった
悲しみを忘れるように

まるで人と生れなかった
悲しみを忘れるように

杜中の庭は
闇の滋養を吸い込んで
小雨の闇に佇んでいる
薄く照らされて
誰も通らぬ外灯に
ひっそりと
静かに照らされている

『森の中 (09/02)』

深い森の中に
一軒の家が有ります

鬱蒼とした木々の中に
赤いトタンの屋根が見えます

目を上の方へやると
枝葉が風に揺れています

上空の青空と陽が
キラキラ斑いています

男は森の空き地で
トントンと薪を割って

女は家の前で
一心に剪定しています

鳥のさえずりとリスが通り
風がひんやりとすぎて行く

男はトントンと斧をふり
カマドの薪，風呂の薪を作り

女は脚立を移動して

二本目の若木取り組んでいます

森の中は今日も静かで
夕餉の食卓はきっと

灯火の中で神への祈りと
無事の喜びを祈るのでしょ

森の中に一軒家があります
赤いトタン屋根が見えます

『一日に一詩 (09/19)』

感情がふれて生じた心を
詩として書きとめる事が出来たら
私は人生満足なのです
そんな一日一詩の満足を出来たら
私はこの上ない幸せなのです
そう　この上ない幸せなのです

『思い (09/19)』

終業の音が響き渡る
工場ならサイレンが鳴り
オフィスなら木琴の調和が
夕暮れ時の道には
帰宅の人々の三々五々が
夕日に長い影が道にできる
空は雲まで真っ赤に焼けて
オフィス通りは街燈が灯り
コーヒー店の明かりが
道行く人を照らしている

田畑や野原の一本道を歩きながら
自転車に追い越され車に追い越され
ふっと 私は思う
生きとはなんなのだろうか

高層ビルの 43 階から降りて
今度は地下 5 階のホームに立ちながら
私は ふっと思う
生きとはなんなのだろうか

私は ふっと思う
生きとはなんなのだろうか
人間とは宇宙とはなんなのだろうか
私は他の何者でもなくなぜ私なのか
出会いはなぜ起こるのか
唯一知っているのは
何もわかっていない事を知る
唯一わかっているのは
死があるということだけ
死に向かって歩いているという事だけ

『恐れ（09/19）』

あの時の痛みと同じだ
手首が ピアノ線で
ぐいぐいと千切られるような
痛みが走る
そこから先の手が凍りのように
冷たく食器を洗いながら
お湯に じーっとつけている

あの時 そんなに気にしていなかった
妻に言うほどの事でもなかった
病症が現れてからあの時と知った

震えているのです
再び始まったのだろうか
この 手首を千切られるような痛み
氷のような手の冷たさ
再び始まったのだろうか
たった一人 たった一人
蓄えたものなど 食いつぶすだろう

結果を生きてみるか
どう言う自分になっているか
人間として見てみようか
どういう生活者になろうが
生きに戦う自分を見てみよか
それが 私の人生なら
乞食になっても生きてみようか

End all 2001/09

『冬の音 一（10/27）**』**

真夜中に降る雪は
どんな音ですか

貴方の心に忍び込む
雪の響きは どんな旋律ですか

私の肩に積もる雪は
冷たく 重たく 悲しいです

雪って 楽しい響きがあるんですか
雪って 暖かい語らいがあるんですか

真夜中に降る雪は
どんな音ですか

寝静まった町を通り過ぎる
精霊の響きは どんな旋律ですか

私の夢への旅路は
子供の頃の 貧しさと悲しさです

雪って
夢の入り口ではないのですか
雪って
想いを運んでくる霊ではないのですか

End all 2001/10

『**秋** (11/15)』

北風の吹る日々に
もみじの燃えるような紅葉の
銀杏の黄金に輝く葉の
真の意味を 私はいま知った
絵を描けるようになって
秋の一面を 私はいま始めて掴んだ
誰に感謝したらよい
誰に喜びを伝えたらよい
この痛む身体を引きずって
失意の中で 孤独に耐えて
いま 私は 秋の意味を知りえた
この喜びを 神に感謝し
生きの悲しみを もっと描けたら
文章にして 絵にして 音楽にして
生きの喜びを もっと描けたら
文章にして 絵にして 音楽にして
暖かき温もりが
冬の季節の中にあることを
いま知ったから もう恐くはない

End all 2001/11

『Osama bin Laden **捧詩一** (12/08)』

……Osama bin Ladenの涙を
Peoples of Americaは知って
いるのだろうか
資本主義の象徴ビルの崩壊を
殉死で決行する人のいる心を
Peoples of Americaは知って
いるのであろうか

誰もそれを指摘しない
誰もそれを指摘しない
富と栄華を求めて止まない
仮面が欺瞞社会は
一斉に
人と人との心の絆を尊び
誠実と約束を大事に生きる社会を
抹殺しようと立ち上がる
正義と言う御旗のもとで

……Osama bin Ladenの涙を
Peoples of Americaは知って
いるのであろうか
なぜ 自分達が標的になり
なぜ それほど憎まれているのか
Peoples of Americaは思った事が
あるのだろうか
反省した事があるのだろうか

『Osama bin Laden **捧詩二** (12/08)』

アメリカの人は
とうとう
貴方の心の中へ
アメリカと言う社会の
温かさを伝える事はしなかった
いないな
世界の社会は
罪無き六千人以上の理不尽な死を
決行する 貴方の涙を
知ろうとも 理解しようともしなかった
安らかに眠ってください
可能なら 貴方の墓に
理不尽で死んでいった遺族の方が
花輪を添える日が
必ず来る事を 私は知っているから
安らかに 人の社会を信じて
永久の眠りについてください

『Osama bin Laden **捧詩三** (12/08)』

もう 資本主義社会の道徳に
貴方の呪縛によって 安全は無くなった
たえず 不安が横切る社会になりました
世界が 貴方の墓へ
花輪を捧げる日がくるまで
この資本社会は 絶えず
不安社会の中で育むでしょう
この資本社会は未来を見出す為
何時の日か 貴方の墓へ
花輪を捧げざるを得なくなるでしょう
安らかに眠りについてください
憎しみを消してください
人類社会を信じてください
アッラーフよ 彼らに・彼に永遠の
安らぎを与えて下さい

End all 2001/12